様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３３９１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ０１４９２

研究課題名（和文）中東地域秩序形成における域外大国と域内主要国の競合とその相互作用に関する研究

研究課題名（英文）Study on Competition and Interaction between Great Powers and Major Regional States in Regional Order Formation in the Middle East

研究代表者
溝渕　正季（Mizobuchi, Masaki）

名古屋商科大学・経済学部・教授

研究者番号：００７３４８６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：2010年末以降に顕在化した、いわゆる「アラブの春」を契機として、それまで米国と親米権威主義諸国の「共犯関係」の下で維持されてきた「非リベラルな覇権秩序」 の脆弱性、そして米国が既に中東において引き続き覇権的影響力を行使していく意思もパワーも欠いているという事実、これら2つが白日の下に晒される結果となった。それでは、胎動しつつある新しい中東地域秩序とはいかなるものであるのか。本研究では、主として「アラブの春」以降のペルシア湾岸地域に焦点を当て、「中東の地域秩序形成において域外大国はどのような役割を果たしているのか」という問いに答えを見出すことを目的とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中東は我が国にとってもきわめて重要な地域である。第一に、ペルシャ湾岸地域には世界全体の原油確認埋蔵量の約半分が眠っているとされ（2017年時点）、我が国は同地域に石油・天然ガスのほとんどを依存している。第二に、中東地域は地政学的な意味で激動の国際政治において焦点となることが多く、この地域の政治情勢に通じていないと外交的な駆け引きにきわめて不利になる。こうしたことから、中東地域秩序を正面から研究し、そのダイナミズムの一端を明らかにした本研究は大きな学術的・社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：The so-called "Arab Spring" that emerged after the end of 2010 exposed the fragility of the "illiberal hegemonic order" that had been maintained under the "complicity" of the U.S. and pro-U.S. authoritarian Arab regimes, and the fact that the U.S. already lacks the will and power to continue to exert hegemonic influence in the Middle East.
Then, what kind of new regional order is emerging in the Middle East? This study focuses mainly on the Persian Gulf region after the Arab Spring, and aims to find an answer to the question, "What role do extraterritorial powers play in the formation of the regional order in the Middle East?

研究分野：中東地域研究、国際安全保障論

キーワード：中東　国際政治　安全保障　地域秩序　アメリカ　ロシア　中国　軍事

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究課題を最初に企画したのは 2010 年代後半であるが、2010 年末以降に中東各地で顕在化した、いわゆる「アラブの春」を経て、中東地域秩序には様々な混乱が生じていた。「アラブの春」を契機として、それまで米国と親米権威主義諸国の「共犯関係」の下で維持されてきた「非リベラルな覇権秩序」[1]の脆弱性、そして米国が既に中東において引き続き覇権的影響力を行使していく意思もパワーも欠いているという事実、これら 2 つが白日の下に晒される結果となった。そうだとすれば、胎動しつつある新しい中東地域秩序とはいかなるものであるのか。これが本研究課題を開始した当初の漠然とした問題意識であった。

２．研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究の目的は、主として「アラブの春」以降のペルシア湾岸地域に焦点を当て、「中東の地域秩序形成において域外大国はどのような役割を果たしているのか」という問いに答えを見出すことであった。その上で、地域秩序を分析するための一般化された新たな枠組みを提示することを目指した。

具体的には、①域外大国がどのような中東地域秩序観を構想しているのか、②その実現のためにどのような戦略を追求しているのか、③域内主要国がこうした域外大国の戦略をどう利用しているのか、を明らかにする。そして、中東の地域秩序は域外大国と域内主要国の秩序観の競合の場として構築されている、との仮説を検証することを本研究課題の目的とした。

３．研究の方法

本研究は、主として文献・資料調査、および関係者へのインタビュー調査を通じて遂行された。そして、各国の専門家を研究分担者・協力者に加え、申請者はそれぞれの研究を統括すると共に、

---

[1] 「非リベラルな覇権秩序」という用語は言うまでもなくジョン・アイケンベリーらの論じる「リベラルな国際秩序」という概念に着想を得たものである。アイケンベリーによると、第二次世界大戦以降、国際社会は米国主導の下で「リベラルな国際秩序」を段階的に発展・拡大させてきたという。ここでいわれる「リベラルな国際秩序」とは、大まかにいえば、自由で民主主義的、そして開放的な市場経済システムを採用する諸国家が、国際制度や国際機関を通じて多国間協調や安全保障協力を実現しているような「規則に基づく（rules-based）」国際秩序を意味する。そして、パワーのあらゆる側面で圧倒的な優位を誇る米国は、そうした秩序を主導する「リベラルな覇権国家（liberal hegemony）」としての役割を果たしてきたという。実際、冷戦終結を契機として、東アジア、東欧、南米諸国の多くが民主化を実現し、グローバルな国際経済秩序に統合されていった。また、冷戦期には米ソ対立の影響からほとんど機能していなかった国際機関――たとえば世界貿易機関（WTO）や国際通貨基金（IMF）など――も、その機能や影響力を徐々に拡大していった。1945 年以降、様々な紆余曲折を経ながらも、世界は「リベラルな国際秩序」の方向へと確実に歩みを進めてきた。しかしながら、中東情勢の展開は一貫して、とりわけ冷戦終結以降は米国主導の下で、こうした国際社会全体の趨勢に逆行してきたのであり、この意味でそれは「非リベラルな覇権秩序」と表現できよう。「リベラルな国際秩序」については、G. John Ikenberry, *Liberal Leviathan: The Origins, Crisis, and Transformation of the American World Order* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 2011); Michael Mandelbaum, *The Ideas that Conquered the World: Peace, Democracy, and Free Markets in the Twenty-first Century* (New York, NY: PublicAffairs, 2004) を、それに対して米国が第二次世界大戦後一貫して「リベラルな国際秩序」を追求してきたとする議論が歴史的現実に合致しないとの批判については、Graham Allison, “The Myth of the Liberal Order: From Historical Accident to Conventional Wisdom,” *Foreign Affairs*, Vol.97, No.4 (July/August 2018), pp. 124-133 を、それぞれ参照。

冷戦終結以降の中東地域秩序の変遷を包括的に分析し、そのなかでの湾岸情勢の位置付けや新しい秩序のありかたを考察していった。

本研究課題の構成メンバーは以下の表の通りである。

研究代表者	溝渕　正季	名古屋商科大学准教授	研究統括、中東国際関係・地域秩序論担当
研究分担者	今井　宏平	日本貿易振興機構アジア経済研究所研究員	国際関係理論、トルコ担当
研究分担者	小泉　悠	未来工学研究所研究員	国際関係理論、ロシア担当
研究協力者	村上　拓哉	中東調査会研究員	サウジ・イラン担当
研究協力者	金谷　美紗	中東調査会研究員	エジプト担当
研究協力者	村野　将	岡崎研究所研究員	米国担当
研究協力者	八塚　正晃	防衛研究所研究員	中国担当
研究協力者	栗田　真広	防衛研究所研究員	インド担当

ただし、2020 年初頭以降に世界中で猛威を奮っている新型コロナ・ウィルスの影響により、2020 年度に予定していた海外調査や国際学会における成果発表が実施できなくなってしまった。この点は悔やまれる結果である。

４．研究成果

中東は我が国にとってもきわめて重要な地域である。第一に、ペルシャ湾岸地域には世界全体の原油確認埋蔵量の約半分が眠っているとされ（2017 年時点）、我が国は同地域に石油・天然ガスのほとんどを依存している。第二に、中東地域は地政学的な意味で激動の国際政治において焦点となることが多く、この地域の政治情勢に通じていないと外交的な駆け引きにきわめて不利になる。こうしたことから、中東地域秩序を正面から研究し、そのダイナミズムの一端を明らかにした本研究は大きな学術的・社会的意義を有する。本研究課題を通じて、そうした中東における政治秩序の問題について、多くの研究成果を世に問うことができたと自負している。

まず、本研究課題の遂行を通じて、中東における地域的安全保障上の特徴とでもいうべきものを炙り出すことができた。それは概ね次の三点にまとめられる。第一に、地域の諸国家は非民主主義的で統治能力が低く、非国家政治主体の存在感が顕著である点。第二に、国家間紛争を解決するための有効な地域組織・制度が不在である点。そして第三に、域外大国の影響力が際立っており、地域秩序は域外大国と域内主要国との相互作用によって形成されるという点、である。

1990 年代以降、米国の覇権的影響力の下で、こうした地域安全保障上の特徴（あるいは脆弱性）が実際の軍事紛争へと結実することはほぼなかった。だが、2011 年以降、米国主導の覇権秩序が急速に綻びを見せるなかで、これらすべての特徴が複合的に組み合わさり、地域秩序に大きな動揺をもたらしているのである。

また、米国の中東に対する関与の度合いが低くなっていくなかで、米国以外の域外大国や域内主要国の影響力と行動の許容範囲は相対的に大きくなりつつある。事実、「アラブの春」以降、伝統的な地域大国（エジプトとシリア）がそのパワーと影響力を大きく減退させる一方、サウジアラビアやイスラエルは新たな地域秩序構築に向けて主導的役割を担おうと積極的な外交を展開するようになっており、これがサウジ・イラン間の対立を深刻化させている。

そうしたなかで、本研究課題と通じて、中東地域秩序の将来を見通す上で中国の動向がとりわ

け注目に値するとの知見が得られた。アジアから欧州にまで広がる広大な経済圏構築戦略、すなわち一帯一路構想を進める中国にとって、アジアと 欧州の中間に位置する中東は無視し得ない要所であり、同地域の持つ地政学的重要性は近年ますます向上しつつある。ただ、多くの研究者が指摘しているように、中国にとって中東はあくまで二義的な重要性しか有さない地域である。同国の中東関与は依然として経済的な側面に限定されており、米国がこれまで果たしてきた（覇権国という）役割を同国が肩代わりする可能性は（少なくとも近い将来においては）きわめて低い。それでも、経済力をテコとした中国の影響力は近年、中東諸国にとって無視できないものとなりつつあり、中東における中国の経済的権益が拡大するにつれてそれを軍事的に防衛する必要性も高まっていくだろう。他方で、中東地域秩序に与える中国外交のインパクトについては、これまでにほとんど研究がなされてこなかった。ゆえに、今後の課題としては、中国の影響力の相対的拡大が中東地域秩序に与えるインパクトを検証することは急務であると言える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計16件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 溝渕正季	４．巻 31(6)
２．論文標題 米国の影響力低下と地域秩序の混乱：米国の「自由と民主主義」に翻弄され「冷戦」に陥った中東	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Wedge	６．最初と最後の頁 39-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 溝渕正季	４．巻 47(3)
２．論文標題 戦略的資産か政治的負債か? サウジアラビアにおける米軍基地と基地政治	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国際安全保障	６．最初と最後の頁 55-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 溝渕正季	４．巻 18(11)
２．論文標題 シリーズ：中東基礎講座（第 22 回）レバノン	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中東動向分析	６．最初と最後の頁 24-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 今井宏平	４．巻 47(3)
２．論文標題 反基地運動はなぜ起こるのか／活性化するのか?トルコの事例の比較分析	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国際安全保障	６．最初と最後の頁 17-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kohei Imai	4．巻 35(1)
2．論文標題 Why Syrian Refugees in Turkey Choose Turkey as a Final Destination: Results of Public Opinion Survey of Syrian Refugees in Turkey	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Annals of Japan Association for Middle East Studies	6．最初と最後の頁 119-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井宏平	4．巻 536
2．論文標題 公正発展党の内政における政権維持の手法（2002年～2019年）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 中東研究	6．最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 八塚正晃	4．巻 2019年度、Vol.III
2．論文標題 中東地域への中国の軍事的関与	5．発行年 2019年
3．雑誌名 中東研究	6．最初と最後の頁 20-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金谷 美紗	4．巻 532
2．論文標題 2018年エジプト大統領選挙でのシーシー再選 ： 見せかけの安定か	5．発行年 2018年
3．雑誌名 中東研究	6．最初と最後の頁 67-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 栗田真広	４．巻 85
２．論文標題 パキスタン・ロシア関係の発展と限界	５．発行年 2018年
３．雑誌名 NIDSコメンタリー	６．最初と最後の頁 --
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 今井宏平	４．巻 40
２．論文標題 なぜトルコとアメリカの関係は悪化したのか	５．発行年 2018年
３．雑誌名 立教アメリカン・スタディーズ	６．最初と最後の頁 123-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 栗田真広	４．巻 2019年1月
２．論文標題 パキスタンと中国の戦略的関係：「全天候型友好関係」の軍事的側面	５．発行年 2019年
３．雑誌名 インテリジェンス・レポート	６．最初と最後の頁 65-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 栗田真広	４．巻 92
２．論文標題 インドの対パキスタン空爆：その背景とインプリケーション	５．発行年 2019年
３．雑誌名 NIDSコメンタリー	６．最初と最後の頁 --
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井宏平	4．巻 671
2．論文標題 中東地域秩序にクルド人の居場所はあるのか	5．発行年 2018年
3．雑誌名 国際問題	6．最初と最後の頁 17-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井宏平	4．巻 66
2．論文標題 際立つ民族主義者行動党の存在感	5．発行年 2018年
3．雑誌名 海外事情	6．最初と最後の頁 55-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井宏平	4．巻 194
2．論文標題 『主権の空白地』の統治をめぐるせめぎ合い：イラクとシリアにおける『イスラーム国』とクルド人組織の活動を事例として	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国際政治	6．最初と最後の頁 46-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井宏平	4．巻 6
2．論文標題 トルコにおける2019年3月の地方選挙の展望	5．発行年 2019年
3．雑誌名 中東レビュー	6．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　1件／うち国際学会　9件）

1．発表者名 Kohei Imai
2．発表標題 Why protests against the U.S. bases have not frequently happened in Turkey?
3．学会等名 13th Pan-European Conference on International Relations（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 今井宏平
2．発表標題 外圧による民主化と新興国の民主化支援との関係：公正発展党政権期のトルコを事例として
3．学会等名 日本比較政治学会第22回研究大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 Kohei Imai
2．発表標題 Why Turkey focuses on establishment of small scale organizations?: Causes and conditions
3．学会等名 Mediterranean Studies Association 22nd Annual International Congress（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Masaki Mizobuchi
2．発表標題 Trump and the Middl East: Is the United States Going Right Way?
3．学会等名 Mediterranean Studies Association 22nd Annual International Congress（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 溝渕正季
２．発表標題 「対テロ戦争」再考：ポストIS期における対テロ戦略と中東の謀略戦
３．学会等名 日本国際政治学会2019年度年次大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kohei IMAI
２．発表標題 Kurdish Studies in Japan
３．学会等名 World Congress for Middle East Studies 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kohei IMAI
２．発表標題 Why Syrian refugees choose Turkey as a final destination -The quantitative analysis to Syrian refugees in Turkey
３．学会等名 25th IPSA World Congress of Political Science（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kohei IMAI
２．発表標題 Kinship versus Globalization? Which is the predominant principle of moving for Syrian refugees
３．学会等名 12th Pan-European Conference on International Relations（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kohei IMAI
２．発表標題 Turkey's policies toward the forced migration: Past and Present
３．学会等名 BIM-KAKEN joint workshop（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 今井宏平
２．発表標題 シリア難民に対するトルコとEUの協調行動
３．学会等名 日本国際政治学会2018年度研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kohei IMAI
２．発表標題 The perception toward child education of Syrian refugees in Turkey
３．学会等名 Turkish - Japanese Joint Research Workshop on Migration（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kohei IMAI
２．発表標題 Ideas of intellectual circles during the interwar period and its contribution to non-Western IR: The case of Kadro movement in Turkey
３．学会等名 60th ISA Annual Convention（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

1．著者名 川名晋史編	4．発行年 2019年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 285頁
3．書名 共振する国際政治学と地域研究：基地、紛争、秩序	

1．著者名 山口昭彦編	4．発行年 2019年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 352
3．書名 クルド人を知るための55章	

1．著者名 小笠原弘幸編	4．発行年 2019年
2．出版社 九州大学出版会	5．総ページ数 324
3．書名 トルコ共和国 国民の創成とその変容：アタテュルクとエルドアンのはざまで	

1．著者名 防衛研究所編	4．発行年 2019年
2．出版社 防衛研究所	5．総ページ数 --
3．書名 『中国安全保障レポート2019：アジアの秩序をめぐる戦略とその波紋』	

１．著者名 栗田 真広	４．発行年 2018年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 281
３．書名 核のリスクと地域紛争：インド・パキスタン紛争の危機と安定	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小泉　悠 (Koizumi Yu) (10817307)	東京大学・先端科学技術研究センター・特任助教 (12601)	
研究分担者	今井　宏平 (Imai Kohei) (70727130)	独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・地域研究センター中東研究グループ・研究員 (82512)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関